

応永南蛮船考

虎 頭 民 雄

室町時代の前半，応永年間（15世紀前半）若狭国および薩摩国に南蛮船が着岸しているが，これらの南蛮船はいずれもスマトラ（Sumatra）島東南部に位置した「旧港」という国の船であり，とくに薩摩国に來航した南蛮船は，その後，琉球国とスマトラ島・ジャワ（Java）島との通交を開く契機となったものである。いま，薩摩・琉球・旧港などの資料によって，この間の事情を明らかにし，ヨーロッパ人渡來以前の東洋貿易の実体の一部をみたいと思う。

スマトラ島の東南部にあった旧港という国はどのような国であったろうか。

スマトラ島東南部パレンバン（Palembang）地方には，1～2世紀のころ，ヒンズウ教徒の植民が行なわれ，三仏齊国（シュリヴィジャヤ Srivijaya）を成立させ，一時勢い盛んなるものがあつた。13世紀末に，回教徒のアラビヤ人の侵入があり，14世紀後半になって，ジャワ島のマジャパヒト（Madjapahit）王国の侵入をうけ，三仏齊国は1397年に滅亡するに至つた。

その後，広東人梁道明がパレンバン地方（宝安邦・宝林邦）によって，三仏齊国を旧港と改めた。1405年，梁道明は明の成祖のもとに入貢することになり，副頭目施進卿（郷）がこれを代領した。この年，鄭和は明の成祖（永楽帝）の命をうけて，将士2万7800余人大船62隻をひきいて「西洋」（インド）に至つたが，帰途，1407年，旧港頭目陳祖義が明軍を奸計をもって討たんとした。副頭目施進卿は兵をあげて陳祖義を捕え，鄭和に引き渡して自立した。ついで，その婿を遣わして明に入貢した。そこで，成祖は旧港宣慰司を設けて，施進卿を宣慰司とした。施進卿はその後まもなく死し，その子の施済孫が父のあとをついで旧港（三仏齊）の頭目となつた。彼の死後，その2人の娘（三仏齊国宝林邦本目娘・那智施氏大娘子）が頭目となつて，この地方を治めたのである。

これをもってみれば，旧港は華僑の支配する国であり，明と朝貢関係を結んでいた国であつたと考えられる。

上述の旧港の船と考えられる南蛮船が，応永15年（1408）・同19年（1412）・同20年（1413）の3回若狭国に來ている。すなわち，「若狭国税所今富名領主代々次第」（群書類従巻50）によれば，

1. 一色修理大夫満範。

同（応永）15年（1408）6月22日に南蕃船着岸。帝王御名垂烈進卿。番使々臣。問丸

本阿。彼帝より日本国への進物等。生象一疋黒、山馬一隻、孔雀二対、其外色々。彼船同11月18日。大風の中湊浜（小浜）へ打上げられて破損之間。同16年（1409）に船新造。同10月1日出浜ありて渡唐了。

1. 一色五郎御曹司義範。

同19年（1412）6月21日。南蕃船一艘着岸有之。宿は問丸本阿弥。同8月29日に当津（小浜）出了。御所進物注文有之。

同20年（1413）三月己丑。小浜着岸之鉄船之公事。自内裏可有御直納之由。依武家被仰出之。当御管領細川右京大夫殿（満元）御教書。応永19年（1412）12月13日、被成一色殿。同20年（1413）3月、当所仰下了。

応永15年（1408）6月、若狭国にもたらされた象などは、7月京都へ進貢されている。

「和漢合符」応永15年（1408）7月。南蛮国貢黒象三頭・鸚鵡等。

これらの南蛮船が若狭國小浜に来たのは、単なる漂着とは思われず、また地理的条件からみても偶然とは考えられない。おそらく、博多に入港した後、瀬戸内海の家賊の掠奪をさけて、日本海沿岸を東上し、京都に一番近い若狭國小浜に入港したものであろう。

この時の南蛮がどこであったかについて、新村博士は「帝王御名垂烈進卿」によって、「スマトラ島の東南部に位する三仏齊国の後なる旧港ではないか。」とされている。（新村出「続南蛮広記」——足利時代における日本と南国との関係）

「垂烈または阿烈は、ことにジャワにあって尊称として用いるらしく、明史爪哇伝に、正統元年使臣馬用良言、前任八諦来朝、蒙恩賜銀幣、今為垂烈秩四品、乞賜金幣從之、と見ゆるそれであって、成祖実録永樂二年・三年・五年の条にも、爪哇国西王の使者に、阿烈于都万・阿烈安達加李奇・垂烈加恩などの名が出ており、三年の条には、渤泥国使に阿烈伯成の名をみとめた。されば、旧港の頭目たる施進卿を日本に来た同国人が、垂烈進卿と書いたことは疑いない。垂烈とは元史に人名にみゆる阿里と同じく、回語にて「大」という義、すなわち、アラビア語のAliの音訳ではないかとも思うが、広東音の烈（入声）ではいかがであろうかと、なお疑いを存しておく。」

この若狭国着岸の南蛮船については、その後、旧港船ではなく、ジャワ船であるとの説が秋山謙蔵氏らによって出されたが、今日これらの南蛮船が旧港船であることは疑いないものとなっている。

若狭国への南蛮船の往来は、その後の記録にはあらわれない。しかし、その後、応永25年（1418）にも南蛮船が来たらしいことは、「満濟准后日記」応永25年8月18日の条に

自南蛮国進物到来。沈象牙藤以下等済々在□。

とあるによって察せられるが、この南蛮国が上述の旧港であるかどうかについては確証はない。

応永26年（1419），南蛮船が今度は南九州の地に来着した。

「志布志阿多文書」（鹿児島県史料拾遺 VII）にはこれについての8通の文書がある。これらの文書にもとづいて、「鹿児島県史第一巻」では次のようにしている。（630頁以下）

「応永26年（1419），筑前博多へ一隻の南蛮船が来航したが，海上における海賊衆の怖畏あるによって，7・8月の交，南航して薩摩の町田飛弾守家久（阿多忠清）の所領に仮碇泊したものである。その注進により同じく8月5日探題渋川道鎮（満頼）はこれに対し警固を加え，博多に護送すべきことを命じ，10月更に使者芥川愛阿を送って博多へ護送の上は，兵庫に廻送せしむるよう京都の下知ありたるにより，かく尽力せしめた。ついでこのころ新たに探題となった渋川義俊は，同時に守護島津久豊に対してその助勢を依頼した。」

「志布志阿多文書」

○渋川道鎮書状。

南蛮船可着当津（博多）候之处。依海上怖畏。其方に逗留之由注進到来候。不可然候。仍先京都へ申候了。如何にも被加御助成。早々此面に被送越候者目出候。就其態遣迎船候。随而津々浦々警固事堅申付候。可有御心得候。恐々謹言。

（応永26年）8月5日道鎮（花押）町田飛弾守殿

○渋川道鎮書状

就南蛮船事。先日進飛脚候之处。委細御返事本望候。然而此船于今逗留。無心元候。時分自京都両度如被仰下候者。早々此面へ召寄。可送進兵庫津之由候之間。重進使者。不可有御無沙汰候。上意可有御不審歟之間。先日御返事共令京進候き。委細之旨愛阿可申候。将又当職事。義俊蒙仰之間。進状候哉。恐々謹言。

（応永26年）10月23日道鎮（花押）町田飛弾守殿

○渋川義俊書状

就南蛮船事。進芥河愛阿候。委細申候哉。如何にも早々送給候者目出候。具島津（久豊）方へ申候了。御無沙汰候者不可然候。恐々謹言。

（応永26年）10月23日義俊（花押）町田飛弾守殿

「鹿児島県史」は「筑前博多へ一隻の南蛮船が来航したが，海上における海賊衆の怖畏あるによって，7・8月のころ南航して」薩摩に着いたとしているが，上の資料に「南蛮船可着当津（博多）候之处」とあるので，博多へ赴く途中，薩摩に寄港したとみるべきである。南海地方の珍貨を多く積んでいたらこそ，その博多への廻航を急いだのである。また，前述の若狭国小浜着岸の南蛮船も，おそらく博多に寄港し，九州探題の手によって瀬戸内海の手を渡して，日本海を航行して小浜へ赴いたと思われる。従って，九州探題

渋川道鎮はこの南蛮船の価値を十分に知っていたと考えられ、また海賊も南蛮船の珍貨を略奪せんとしていたのである。博多を出港して帰国の途にある南蛮船ならば、九州探題がこの船の回航について、これほどの熱意は示さなかったであろうと考えるからである。

次に、この南蛮船は薩摩のどの港に入っていたであろうか。県史にはただ「町田家久の所領」とあるのみである。当時町田家久（阿多忠清）は阿多一郡を領していたころなのでこの南蛮船の来航した港は志布志ではなく、阿多・加世田方面の港であると考えられる。

〔註〕

「志布志阿多文書」の解説に、次のように示されている。（鹿児島大学五味克夫氏）

「阿多（町田）家がいつから志布志に居住したかは明らかでないが、『志布志旧記』によれば、『天正11年6月11日肥前有馬へ志布志より罷立候人数』として『阿多周防守』等の名をあげ『以上20人6月11日肥前有馬へ志布志より罷立候人数』としてあり、又『天正14年に90人程志布志へ召移され候人数』として列挙してある人名中にも『阿多周防守』の名があげてある。更にさかのぼって10代立久の条に『天文7年新納家志布志没落にて島津豊後守（忠朝）領地となり、其以後外城になり候て山田・鹿屋・平田……阿多……等の人数（30）にて少人数之由候事』とあり、おそらく中世末、本領阿多をはなれて志布志に転住するに至ったのであろう。……

したがってこれからかかげる史料は、それ以前の阿多家がまだ志布志に移住しない、主として薩摩国阿多郡を所領としていたころの史料であることを注意しなくてはならない。（南蛮船関係史料中の当津とあるのも志布志ではなく、阿多、加世田方面の浦であろう。）」

なお、「日新菩薩記」によれば島津忠良の時代（天文年間）加世田の片浦に琉球船が、また小湊の津に南蛮船が漂着しているので、応永の南蛮船もこれらの港に入ったであろうと考えられるが、はっきりとは断定できない。

次に県史は、

「ついで翌3月義俊の被官宗寿は更にこれを促し、重ねて3月義俊は去月いよいよ南蛮船の出航すべき由、那弗答（ナフト-----土人船長の意）より来状ありたるも今に延引せるをもって、更にこれを催促し来たつた。島津久豊は、当時町田家久と不和の間にあつたから、これと別箇に交易の利を占めんとせるものの如く、その臣石塚大和入道を義俊へ遣わしてあっせんせしめた。石塚大和入道はすなわち帰国して、更に町田家久に南蛮船の上洛の催促を伝えたのであった。しかるに、3月23日、家久の南蛮船廻送の準備中、島津久豊は数百艘の兵船をもって南蛮船を掠奪せんとはかり、南蛮船は驚いて綱を切り捨てて拔碇し去った。」

「志布志阿多文書」

○渋川義俊書状

就南蛮船事。進愛阿候処。御奔走之由申候。目出度候。但于今延引不可然候。其段島津方便に申候了。如何にも早々此面へ被廻候者可然候。尚遅々候者。上意可無勿体候。恐々謹言。」

（応永27年）2月17日義俊（花押）町田飛弾守殿

○宗寿（渋川道鎮カ）書状

就南蛮船事。愛阿越国候処。御奔走目出候。随而自島津殿使者。尚委細申候。如何にも此船早々被遣廻候者可然候。事々連々可申候。恐々謹言。

（応永27年）2月23日宗寿（花押）町田飛彈守殿

○渋川義俊書状

島津方使者帰国之時。委細申之處。南蛮船去月15日可出船之由。自那弗答状到来候。目出候。但又延引候歟。其後さ右無音候。無心元候。度々委細申之候上者。雖不可有等閑候。尚々御奔走可然候間。態進飛脚候。具島津方へ申候。可有御心得候。恐々謹言。

（応永27年）3月23日義俊（花押）

○町田家久書状案

（端裏書）「あくたかわとの方御返事」

先日石塚大和入道下向候時。預御状候条。於今恐悦至候。随而就南蛮船事。自上方御書拜領。面目至。畏入存候。兼又彼船出津致用意候刻。匠作（島津久豊）大勢にて去月23日。此境寄来候あひた。馳向防戦仕候処。仍敵方数百艘。以兵船彼船可取之由相聞候間。現形候間。大驚候て。綱切捨。俄退出候。よて懸置候間。其外当津者共。不残一人も退散候間。是非不及候。無面目次第候。此等之趣彼使者委細令申候間。定披露可被申候哉。此趣任上意候様に御方便。於身悦喜此事候。恐々謹言。

（応永27年）4月7日家久御判 芥河殿

○代主書状

先以渡愚状送り候処に。御念此の御意のとおり悦喜仕候。兼又かさねてあんないを申入候。御はいりやうの御事ひたすらにたのみ入存候。じこ我々かふねの間事は、風により便て。しせんの時御意をたのみ入候。委細者。使僧申され候へく候事候。恐々謹言。

進上 5月30日 代主（朱印）

これらの資料の中に出てくる「那弗答」（ペルシャ語の音訳で船主または貿易家の意）は、後にあげる琉球側の資料によって、旧港の頭目施智孫（施濟孫）の遣わした「那弗答鄧子昌等20余名」をさすものであり、またこの南蛮船が無事博多の渋川道鎮のもとに着いたことも明らかである。博多に着いてから兵庫へ赴いたかどうか明らかでないが、おそらく赴かなかったのではないかとと思われる。

さて、この南蛮船が博多に到着してからの行動については、日本側の資料は何も語っていないが、偶然にもこれに関する資料が、琉球の外交文書集「歴代宝案」の中に出てくるのである。

「歴代宝案」巻34山南王併懷機文稿に次の文書がのせられている。

○琉球国王相。懷機。端肅奉書旧港管事官閣下。自永楽19年（1421）。准日本国九州官

源道鎮（渋川満頼）送到。旧港施主烈智孫差来那弗答鄧子昌等20余名到国。告乞通送回国。准此。縁無能諳火長。思係遠人。雖難以久留未故檀便。除啓国王敬蒙。即便差令正使闍那結制等。駕使海船一隻。已致暹羅国。仍行乞為転送。。未知到否。今有本国頭目実達魯等。駕□小船一隻。装載磁器等貨。到貴国買売。仍令尺楮付実達魯。前詣旧港管事官前。告稟回扱。今備礼物馳送。少伸遠意。万望笑留所有。今去人船煩為。寛容買売。趕趁風迅回国。庶為四海一家。永通往来便益。今将礼物開坐于后。草字不宣。

「今開。素段5匹。鎖子甲2頭。長刀2柄。腰刀2柄。褶扇10把。

宣徳3年（1428）10月5日奉書

〔註〕

王相懷機について（東恩納寛淳著「琉球の歴史」による。）

「尚巴志を助けて統一の業を成就させたものは懷機である。懷機という人物の伝記は詳細にはわかりかねるが、大体知り得たところでは、永楽のはじめごろ、尚思紹時代に渡来した福州人で、思紹・巴志・忠・思達・金福と5代に歴任し、前後50年ほども国政顧問の要職にあたり、首里城内には王相府（この名は歴代宝案所収文書に見えているが、実際にそういう役所があったのか、又は中国向の漢訳であるか定かでない。後世の例から推すと、国相又は王相に相当する職名は摂政セッセイで摂政邸ならば摂政御殿セッセイオドンとよばれたはずであるから、王相府というのはその漢訳名かもしれない）と称する特別の官庁もあり、明への進貢も、国王と並んで、独立の贈答が行なわれ又王相府所属の役人も特別におかれていたようである。」

この資料から大体次のことがわかる。すなわち、「日本国九州官源道鎮」（九州探題渋川道鎮）は薩摩から博多に入港した旧港施主烈智孫（施濟孫）の派遣せる那弗答鄧子昌等20余名を琉球国へ送りとどけ、本国旧港への送還を頼むことにした。これはおそらく、当時日本本土においては、まだ南海地方へ船を進めたことがなく、また他の南蛮船が来朝するあてもなかったもので、渋川道鎮は1421年（応永28年・永楽19年）、とりあえず一行を琉球国まで送ったものであろう。

ところが、琉球国もまだ旧港まで船を送ったことがなく、航路に精通した船長もいないので当惑したが、いつまでも遠国の人々をとどめておくわけにもいかないもので、とりあえずシャム国まで送り、シャム国から旧港へ送ってもらうことに決め、正使闍那結制（謝名掟）をのせた船をシャム国に送り、旧港の人たちをひとまずシャム国へ送りとどけた。しかるに、1428年（宣徳3年）に至るまで、彼らがはたして無事に旧港に帰りつくことができたかどうか分らないので、琉球側としては、ここに実達魯（小樽）を遣わすことになった。実達魯の船はシャム国を経由して旧港に行くことになるが、旧港に到着の上は、自由貿易をみとめてもらい、なるべく早く本国へ返すようにしてもらいたいという意味である。

闍那結制の船がいつシャム国へ鄧子昌らの一行を運んだかは、はっきりしないが、1425年（洪熙元年）の琉球国中山王からシャム国あての文書によって、大体的見当がつけられる。（以下引用の文書はすべて「歴代宝案」所収のものである）

○琉球国中山王為朝貢事。近拋使者佳期巴那（垣花）同通事梁復告称。永樂17年（1419）間。蒙差使者阿乃佳（新川）等坐駕海船三隻。賫捧礼物。前詣暹羅国。奉獻事畢回国告称。蒙所在官司言称。礼物短少以致官買磁器。又禁約本処不許私売蘇木。俱蒙官売要。補其船錢。切照事有艱緊。深是有損。使往来人員告乞施行。当蒙。敬奉王令旨。何不早說。惶恐之甚。今後去船加感礼物。奉獻以表遠意。敬此。外除自永樂18年（1420）至今加感礼物。遣使佳期巴那通事梁復等。坐駕船隻。經涉海洋。動有數万余里。歷涉風波十分艱險。及至到彼。除將礼物交進外。蒙所在官司仍行官買。磁器更甚。因致盤纏欠乏。深為違損。難以奉命往復。告乞施行。拋告再三。因此。永樂22年（1424）停止船。除外參照。自洪武至永樂年來。曾祖及祖王先父王。至今通年累遣使者。賫捧薄儀。前詣貴国。奉獻盡今多年矣。荷蒙貴国親愛。懷念四海以為一家。累蒙回惠珍賜。及寵愛遠人。常復從容貿易。並無官買之事。切恩感戴之甚。今告事理。合貴国煩為照前矜憐遠人航海之勞。免行官買磁器。容令收号蘇木胡椒等貨回国。庶使永通往来。遠人悅服異域懷柔。今將奉獻礼物數目開坐于後。須至咨者。

今開。織金段5匹。素服20匹。硫黄3000斤小報2500斤正。腰刀5把。摺紙扇30柄。大青盤20箇。小青盤400箇。青碗2000箇。

右咨 暹羅国

洪熙元年（1425） 月 日 咨

これによると、琉球船は貨物の売買の方法に関して、シャム国官憲との間に紛争を生じ、1424年（永樂22年）をもって一時貿易が中断している。旧港の人々が九州から琉球へ送られたのが1421年（永樂19年）であるから、これらの人たちが、閩那結制の船でシャム国に送られたのは1422年か1423年のどちらかということになる。

次に、実達魯の船が1428年（宣徳3年）シャム国から旧港へ赴いたことは、次の文書によって明らかである。

○琉球国中山王為貢事。照得本国稀少貢物。為此今遣正使実達魯等。坐駕□字号海船一隻。装載磁器等物。前往貴国生産地面。收買胡椒等物。回国謹備進貢中国。仍備礼物。詣前奉獻少伸遠意。幸希收納。煩令差人船容令買売及早打發。乘趁風。迅回国便益。永通往来。以為四海一家。今將奉獻礼物數目開坐。移咨施行。須至咨者。

今開。素段20匹。大青盤20箇。小青盤400箇。小青碗2000箇。

宣徳3年（1428）9月24日 往旧港。

上の文書の終わりに、「往旧港」としてあることは、この実達魯の船がシャム国から旧港へ赴くものであることを示している。

このころ、琉球の状況はどのようなであつたろうか。

14世紀中ごろ、琉球は山北・中山・山南の三つに分裂して互いに争っていた。はじめ、

佐敷の接司であった尚巴志は 1405年父恩紹を奉じて、中山王武寧を亡ぼして、中山王とした。1416年巴志は山北を攻めた。城はおちいて王攀安知は戦死し、山北の領土はすべて中山に併合された。1422年巴志は父のあとをついで中山王となり、さらに、1429年山南王他魯毎をうち平げて三山を統一した。この年巴志は使を明に遣わして琉球の統一したことを告げ、上表して冊封を願った。明の宣宗は冊封使柴山を遣わし、詔書をもたらし、巴志を琉球国中山王に封じた。翌年再び柴山を遣わして巴志に尚姓を授け、これ以後、琉球国王は必ず尚姓を称することになったという。

始めて旧港に船を派遣した1428年(宣徳3年)は、中山王尚巴志が山南王を討伐して三山を統一する前年であって、国家創業の多事の際にもかかわらず、遠くスマトラ島の旧港にまで使船を派遣したところに、貿易家としての尚巴志の熱意がみられるのである。

1428年(宣徳3年)始めて旧港へ赴いた実達魯の船は無事翌1429年(宣徳4年)6月琉球に帰ってきた。さきにシャムを経て旧港におくりとどけた鄧子昌等は無事帰国し得たよう、琉球船(実達魯)の来訪に対して旧港は大いによろこび、自由貿易を許して、奇物を懷機に贈っただけでなく、使者(財賦寧陽等)を琉球船に同乗させてその厚意を謝した。旧港の使者は尚巴志に会い大いに歓待された。懷機は尚巴志の命をうけて、1430年(宣徳5年)10月18日、琉球船(1隻または2隻)を仕立てて、歩馬結制(浜掟)および達旦尼(タタニ)を正使として旧港の使者(蔡陽泰)を国に帰らしめた。これが2回目の旧港遣使である。この時、歩馬結制は三仏斉国旧港僧亜利吳閣下に対し、達旦尼は三仏斉国宝安邦本目娘に対する正使として派遣された。またこれと同時に南者結制(名里掟?)を正使とする船も、シャム国をへて始めてジャワ国へ遣わされることになり、同時に琉球を出発した。これは旧港の使者の来訪によって、この方面の状況が明らかとなり、旧港よりさらに東へ進んでジャワに至る航路が確認されたためであろう。

○琉球国王相。懷機。端肅奉書三仏斉国旧港僧亜利吳閣下。自宣徳4年(1429)6月内。
蒙貴国遠来財賦寧陽等。附搭本国船隻。賚捧箋文礼物。到彼蒙此。本国人船多蒙管行寬容買売。承惠国奇異稀物。并賜卑爵奇物。速行類進乃茲使啓見。敬奉王令旨。多感厚意。看取人船。又送礼物。使賞来使衣服好着管待。就備礼物速行回謝。遣使駕船護送回国。敬此。除敬遵外本欲隨即遣船。奈欠船隻以至延。今特遣正使歩馬結制等管送礼物。領駕人船護送来使蔡陽泰回国。就備尺楮前詣拜謝。少伸遠意。万望收納。煩念四海一家。今去人船装載磁器等物。煩為寬容買売。趁趁風信回国。今将礼物。開坐于后。草字不宣。伏乞照鑑。

今開。馬2匹。閃色段10匹。段5匹。羅3匹。

宣徳5年(1430)10月18日 王相懷機

○琉球国王相。懷機。端肅奉書三仏斉国宝安邦本目娘粧前。自宣徳4年(1429)6月内

虎頭：応永南蛮船考

承得封書。送到奇物。就付本国船隻。前來卑爵啓進。敬奉王令旨。感得遠信。備知書中。合遣人船。特去回謝。敬此。敬遵外得見翰墨內老節。參見前年間貴処人船到彼。本欲差使□送。欠無火長。致送暹羅間。甚是有愧。所差船隻會問之間。多蒙管待。并送奇物感謝厚意。今特正使達旦尼等領駕人船。賁送礼物。前詣回謝。幸希收納。今去人船專托顧問。煩為作成寬容買売。完日發趁風。迅回国。永結四海一家。為幸。草字不宣。伏乞照鑑。

閃色段 3 匹。青段 2 匹。腰刀 2 把。

宣德 5 年（1430）10 月 18 日 王相懷機奉書

○琉球国中山王為礼儀事。遠聞。草臣忠。寬仁大度。撫国民安泰而樂業。懷柔四海。諸国来歸。乃之大德也。久欲遣使来賀。奈微国欠諸海道之師。以致如斯失大儀。今有頗曉水道之人。聊備薄儀。特遣正使南者結制等。駕船賁送礼物。前詣貴国奉獻。少伸芹沈之意。幸希收納。今遣人船客。令買売及早打發。趕趁風。迅回国使益。永通往来。以為四海一家。今將奉獻礼物数目開坐。移咨施行。須至咨者。

今開。金段 2 段。金紗 3 匹。素段 20 匹。腰刀 5 把。大青盤 20 箇。小青盤 400 箇。小青碗 2000 箇。

右咨 爪哇国

宣德 5 年（1430）10 月 18 日 咨

琉球船（正使步馬結制及び達旦尼）は旧港の使者をのせて、1430 年（宣德 5 年）10 月 18 日ごろ琉球を出帆し、12 月 11 日に旧港に到着しているので、片道約 50 日間かかったわけである。彼らは約 2 カ月半旧港に滞在して、翌年 2 月 2 日をもって旧港を出発し帰国の途についた。步馬結制の船が旧港において、シャム国の船と会っていることは次の文書で明らかである。

○琉球国中山王為謝貢事。今照宣德 5 年（1430）拋正使南者結制等告称。蒙差各船使臣等到暹羅国。奉獻礼物外。緣各船裝載磁器等物蒙。所在管事頭目多拘官買。將磁器逐一搬選抽取。乃至遷延日久。又給貨物価錢亦加欠剋切思海道□遠數万余里。經歷風波十分艱險。方得彼。不若如前寬柔撫恤。甚至欠剋不便。再三告辭。不肯奉使前來。為此停止外。近拋差往三仙齊国旧港公幹回来正使步馬結制等告称。在於旧港遇有暹羅国船隻。來人言說。前年間管事頭目蒙国王責之。立事已訖拋告。切念貴国交通亦尚往来之儀。行人伝命用堅和好之望。合行。今遣正使郭伯茲母（コハチ）等。賁捧礼物。坐駕隻。前詣奉獻。少伸芹沈之意。幸希海納。更煩今去人船四海一家為念。寬免官買。自行兩平収買蘇木等貨回国。應備進貢大明御前。乃早為打發。趕趁風迅回国便益。今將奉獻礼物。開坐于後。咨請施行。須至咨者。

今開。官段 5 匹 色段 20 匹。腰刀 2 把。櫛子扇 30 把。大青盤 20 箇。小青盤 400 箇。

小青碗2000箇。硫黄3000斤報2500斤小。

右咨 暹羅国

宣德6年(1431)9月3日

琉球船の旧港出発に際し、三仏齊国宝林邦本目娘及び愚婦卑那智施氏大娘子は2通の書と布・沈香・象牙・酒等の礼物を琉球船に托した。前述の如く、旧港宣慰司の施済係のなきあと、2人の娘が頭目の地位にあって旧港を支配していた。この2人がそれであり、本目娘・大娘子というのは女頭目のことである。

○三仏齊国宝林邦□次。本頭娘稽首再拜。即日孟春謹時。伏惟琉球国公卿王相。台座。譴責不謂謙仁貶物。答教佩服厚意。退揆欠然。自宣德5年(1430)12月10日受到寄来批信。大膽收授。齊全感謝釣候興居多福。仰依大夏帡幪之庇。尚稽瞻仰釣庭。此承藻翰誨諄復少礼。鶴俟治報。至今謙然。昨承敬帖。諒蒙恕照。今特貴国本船回還。賚寄礼物。前詣回謝。幸希收納。今来人船買売完備。趕趁風迅前往処所。草字不專。伏乞頓納。

苾布2匹。長文節智1塊。頂□1匹。沈香10斤。

宣德6年(1431)2月3日 本頭娘再拜奉書

○三仏齊国宝林邦愚婦卑那智施子大娘子。百拜上書琉球国王相尊候台前。拜違台□。□易歲華。樞掌当朝文事。即日仲春謹時。敬惟公庭清□釣候納福無量。自宣德5年(1430)船隻到来到邦。明称貴国王庭仁義礼祝。未由參□均輝。少意奉誦。草邦賤国。希少貴物。今見便船回国。□礼貢奉准表鵝毛之意。草字不專。伏乞笑納。

今開春來□礼。紅花布被面1合。紅花布頂子1合。青花文佃布2合。象牙2条。

淡杯仙酒4□。

宣德6年(1431)2月3日 愚婦卑那智施氏大娘子百拜奉書

第3回の遣使は1438年(正統3年)に行なわれた。正使阿普尼是(大西)は安字号船に乗って、旧港管事官と宝林邦施氏大娘子の2人にあてた懷機の2通の文書を携え、絹織物や漆器類をのせて旧港に向った。

○琉球国王府相懷。端拜奉書三仏齊国旧港管事官閣下。近自卑爵敬奉王旨。敬此。除敬依奉行外。今遣正使阿普尼是等。坐駕安字号海船壹隻。領齎礼物。詣前表送遠信。万望收受永結四海一家。相通音好。仍煩卑令人船從便買売。趁風時月回還。及照已先宣德5年(1430)本国遣使駕船前至。甚蒙回奉礼意。到国行類進。喜受敬此。合行拜謝知念。今將送信物件。開坐数目于後。草字不專。伏希照亮。

今開。各色段11匹。各色羅9匹。各色紗5匹。

正統3年(1438)10月4日

○琉球国王相府懷。端肅奉書三仏齊国宝林邦施氏大娘子粧前。自於宣德6年(1431)。甚感珍奇好信及書一封。就付来使船隻回国。已憑喜受収訖。向後累欲遣使屢達貴国。

虎頭：応永南蛮船考

為少火長。以致疎曠。年深。其多感厚意。銘心不忘。為此今備微誠奉謝。遣使齎送信物。以表遠意。万幸笑納。是結四海一家。永通心盟。仍望共成柔恤遠來人船。早令從便買売回国。今將礼物開坐于後。草字不專。万望心照。

今開。漆盤中様200箇。漆棧200箇

正統3年(1438)10月26日

琉球国中山王尚巴志はその翌年1439年(正統4年)になくなったが、その次の年1440年(正統5年)に第4回目の旧港への遣使が行なわれた。

○琉球国王相府王相懷。端肅奉書三仏齊国宝林邦本頭娘粧前。得知先於宣徳6年(1431)間。甚謝好信。憑書収訖。向後却少能諳海道火長。以致疎曠多年。今令正使伍実佳勃也(具志川?)。齎捧遠書。代面奉謝備送意。幸希収納。是心盟四海一家。永通音好。更煩。共成憐恤遠來船。早令買売回国。今將礼物開坐于後。草字不專。幸希心照。今開。

正統5年(1440)9月 日

○琉球国王相府王相懷機。端肅奉復貴国三仏齊旧港宝林邦施氏大娘粧前。自於宣徳6年(1431)。甚喜収見珍宝奇并書壺封。所付本国來使船回国。逐一憑書収訖。向後累欲回謝屢達貴国。却少航海火長。以致疎曠多年。其感激之心不忘朝夕。為此今備礼物馳送。以表遠意。惟盟心四海一家。万容酬謝。仍帝笑□□□□□懷遠。早令今次船從□□□。礼物于後。草字不專。万望心照。

今開。白段2匹。漆盤中様200箇。漆棧200箇。

正統5年(1440)10月5日 琉球国王相府王相懷機 端肅奉復

琉球国の旧港への遣使は、この1440年(正統5年)をもって断絶してしまった。その理由については、まず第一に旧港までの航路があまりにも遠く危険が多かったこと、第二に旧港で入手しうる物資がそれほど期待したものでなかったこと、第三に琉球側の必要としていた貨物——蘇木・胡椒などはシャム国において十分に調達し得たこと、第四に旧港側が対琉球貿易においてそれほどの熱意を示さなかったことなどがあげられる。

1419年(応永26年)薩摩国に到着した南蛮船(旧港船)が契機となって、琉球国と旧港やジャワ国との交通が開けたことは、ヨーロッパ人渡来以前の東洋貿易が、琉球国を軸として回転し、まことに「四海をもって一家」とする当時の東洋貿易の実体の一部を示すものであったといえよう。



〔参考文献〕

- 「琉球の歴史」東恩納寛淳
- 「日本南方発展史」安里延
- 「沖縄の歴史」比嘉春潮
- 「沖縄一千年史」真境名安興
- 「南島論考」東恩納寛淳
- 「沖縄歴史」島袋源一部
- 「沖縄考」伊波普猷
- 「孤島苦の琉球史」伊波普猷
- 「続南蛮伝記」新村出
- 「日支交渉史研究」秋山謙蔵
- 「日支交渉史話」秋山謙蔵
- 「鹿児島県史第一巻」鹿児島県
- 「沖縄語辞典」国立国語研究所
- 「郷土史大系12（沖縄県の歴史）」拙著

虎頭：応永南蛮船考

関 係 年 表

西 暦	日 本	中 国	関 係 事 項
1405	応永 12	永楽 3	佐敷按司巴志，中山王武寧をほろぼす。
06	13	4	巴志，父思紹を中山王とす。
07	14	5	
08	15	6	南蛮船，若狭に着岸す・足利義満死す。
09	16	7	
1410	17	8	
11	18	9	
12	19	10	南蛮船，若狭に着岸す。
13	20	11	南蛮船，若狭に着岸す。
14	21	12	巴志，使を室町幕府におくる。
15	22	13	
16	23	14	巴志，山北を攻めて併合。
17	24	15	
18	25	16	南蛮船，若狭に着岸？
19	26	17	応永の外寇・南蛮船，薩摩に着岸。
1420	27	18	南蛮船，薩摩より博多に入る。
21	28	19	波川道鎮，旧港の人々を琉球に送る。
22	29	20	巴志，中山王となる・琉球船，旧港の使者を伴い，シャムに至る？
23	30	21	
24	31	22	
25	32	洪熙 1	
26	33	宣徳 1	
27	34	2	
28	正長 1	3	琉球，始めて使船を旧港に派遣す。
29	永享 1	4	巴志，山南を滅し三山を統一す・旧港の使者，琉球に至る。
1430	2	5	巴志に尚娃を授く。琉球船，旧港及びジャワに至る。
31	3	6	尚巴志，三山統一を室町幕府に報ず・琉球船，旧港より帰る。
32	4	7	明の宣宗，室町幕府との貿易再開を尚巴志に依頼す。
33	5	8	琉球使，幕府に至る。
34	6	9	
35	7	10	
36	8	正統 1	琉球使，幕府に至る。
37	9	2	
38	10	3	琉球船，旧港に至る。
39	11	4	永享の乱・尚巴志死す・琉球使，幕府に至る。
1440	12	5	琉球船，旧港に至る。
41	嘉吉 1	6	嘉吉の変・尚忠死し，尚思達立つ。